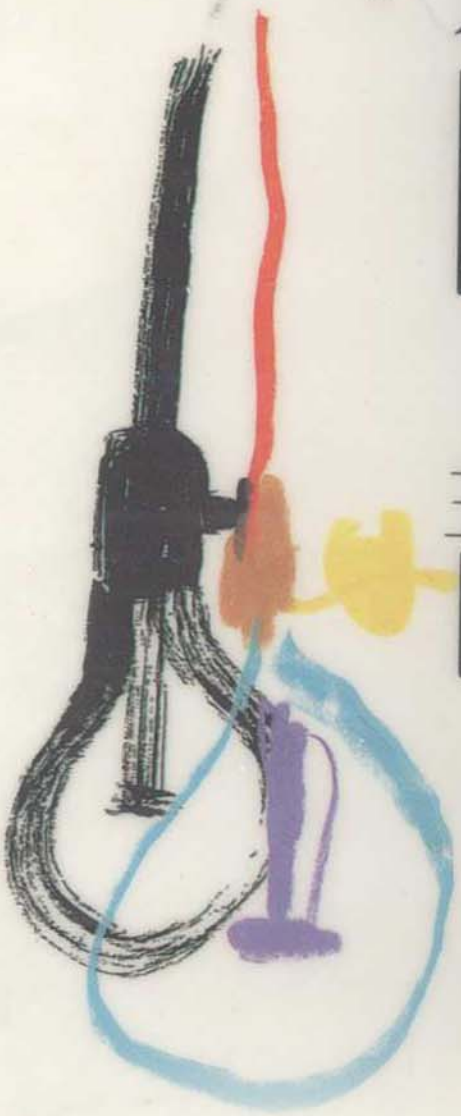
遠い昨日

伊集院 静



遠い昨日
伊集院 静
© Shizuka Ijuin 1993

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1993年10月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185456-9

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

遠い昨日

伊集院 静

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

遠い昨日（きのう）――5
男が目を閉じる時――91
森までの径（みち）――171
記憶の箱――オリジナル文庫のためのあとがき 259
解説　森田芳光 263

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遠い昨日（きのう）

つい数分前に別れた人や風景の記憶が
おそろしくはやい速度で遠ざかって行く。
それとは逆に忘れほうむられたと思っていたものが
今から出逢うはずの時間の前に
あざやかによみがえる。
私が見ようとしている時間。
私が見てきたすべての時間。
そこへ大人でも子供でもない自分が立って
あやふやな生きるという一瞬を
こわごわと綴ってみたい。

ミュージアムの前で

その奇妙な色彩をした熱帯魚を、私は分厚いガラス越しに見つめていた。
背後を通り過ぎる見物客の言葉がフランス語から英語にかわり、つい今しがたはドイツ語のひどくごわごわした会話になっていた。
地中海沿いにある小国・モナコにある海洋博物館の地下一階の一番奥にある展示ケースの前に、私はコートを着て立っていた。
十二月が終わろうとする海風の強い昼下がりだった。
「買い物をしてくるわ」
「どのくらい経かるかな」
「……」
女は黒い毛皮のコートの襟にはさまれた白い頬と切れ長の目に、いつも待合せの時間を私から

聞かれるたびに見せる戸惑うような表情を浮かべ、腕時計を眺めていた。
――また決めかねている。迷っているのだ、この人は自分の時間に。
私は無駄とは思いながら沈黙を続けたあと、
「一時間後に、あの入口の前で逢おう」
と博物館の切符売り場を指さした。

熱帯魚を見ていると、どうしてこんな原色にこいつらは身体を染めたのだろうか、と初めて彼らを見た三十数年前の疑問がそのまま浮んでくる。
科学的なことや専門的な説明ではなく、自分の顔がこんなあざやかな翡翠の緑色と瑠璃石の青色の縞模様をしていたら、私は平気で外を歩けるのだろうか、とか。同じ家に暮す人がそんな肌の色をして、パジャマ姿でトースターの中のパンをのぞいていたら、やはり奇妙な朝ではなかろうか、と思ってしまう。
何度かそんな想像をくり返しては、私は熱帯魚から目を外らせて歩いてきた。
鯨の骨や性器の陳列を観て、私は博物館を出た。
先刻より空はうす暗くかわっていて、頬に当る海風には雨の気配がしていた。
――降るのだろうか。
コートの袖の布地を見つめると、雨に濡れて光り出した重い艶が浮んだ。何千匹と見てきた魚

たちは水の中にいて、とおり雨など気がつきもしない。なのに私の方はずぶ濡れになった自分と、どこかで雨空を見上げている女の姿を想像している。

〝おさかなになった私〟というテレビのCMのコピーがあったが、気味が悪かった印象がある。

やがて十数人の子供と彼らを引率した若い女性の一団が切符売り場の前にやってきた。地元のスクールの子供たちだろうか、皆軽装でリュックひとつを肩にかけている。日本の子供たちとは違って、てんでんばらばらにミュージアムの前に散らばって、切符を買う引率者を待っている。

その中にひとり、通りの右と左を誰か人待ち顔でのぞいている少年がいた。そばかすのある両頬と鼻先が、どこか魚に似ている。

――誰を探しているのだろうか。

その日、急に父が私に、

「水族館へ行くか」

と言った。

私は縁側に座って池に張ったうす氷の光るのを見ていた。

「ほんとうに？」

「なら、早く支度をしろ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

水族館のある町へは、私の家のあるH市から電車で二時間余りかかる。
父は珍しく好きな車を運転せずに、電車で出かけようと言った。母がどんな顔をして私たちを送り出したかを憶えていないところをみると、たぶん母は不在だったのだろう。母の不在がめったにないことなら、私と父がふたりだけでどこかへ出かけたのも、それが一度きりのことだ。
電車にどんなふうに乗っていたのかは、まったく思い出せない。
「四時になったら、この切符売り場の前で待っていなさい。いいか、四時だぞ」
父は背広の内ポケットから財布を出すと、百円札を一枚抜き取って、私にくれた。
昼前にその町に着き、父は水族館の前で切符を買ってよこすと、私を残してどこかへ走り去った。
父はほとんど家に居ない人だったから、私はそれまでも父と口をきいたことがなかった。
一度、年長の姉が父に口ごたえをして、泣き叫ぶほど折檻される声を聞いて以来、私には父がひどく怖い存在にしか思えなかった。
母が父に殴られた顔もみていたし、家の若い衆が火の始末をおこたってボヤ騒ぎを起こし、泣いて父に謝罪している姿も見ていた。
しかし不思議に私だけは叱られなかった。
ひとり息子で、どこか別の扱いを受けていたのかも知れない。
水族館で何を見物したのかは憶えていない。

四時になる前あたりから私は館の入口の切符売り場の脇に立っていた。
時間になるとあらわれると信じていた父が、四時を過ぎても、やってこなかった。
家族連れが何組も通り過ぎて、バスが何台か去って行った。一度売り場の女性に時刻を聞いた。無愛想に女性は時刻だけ告げて、私から目を外らした。
海鳴りが聞えていた。
海峡を渡る船の汽笛が響いた。
――父はここへは来ないのではなかろうか。
私はふいにそう思った。そう思いはじめると、父が急に水族館へ行こうと私を誘い出したことも理由があるような気がした。
――父はここには来ないのだ。
私は知らぬ間にそう信じ込んで、目の前の坂道を見ていた。
桜の木が木枯しに揺れて、関門海峡を冬の夕陽が濃灰色に染めていた。
淋しいというより、自分はいつかこんな運命になるものだったのだと思った。

女はまだあらわれなかった。
四十分余りが過ぎていた。女がやって来ると思われる左の道に、カテドラル教会の白い大理石の建物が陽差しにかがやいていた。空を見上げると、先刻までの雨雲が千切れて、晴れ間がのぞ

いている。

――降らないのだ。

私はひとり言を言ってから、何本目かの煙草に火を点けた。苦い味が口の中にひろがって、その唾液に舌をつけると、女がこの異国の街で誰か別の男に逢っている予感がした。

ふいに三十数年前の、若い父のうしろ姿が浮かんだ。

怖い時間だと思った。

ポロを見ながら

「少しそのあたりを歩いてくるよ」
私は男にそう言って、競馬場のスタンドを降りて行った。
「最終レースまではここに居ますよ」
パリから来たカメラマンが背後でよく通る声で言った。
――競馬場とカジノに行けるなんて、今回の仕事はラッキーだと思いました。
数日前、ベルギーのゲント市で初めて逢った時、カメラマンは嬉しそうに言った。
「ギャンブルは好きなんですか？」
私が聞くと、
「ええ……」
と白い歯を見せて、長髪の頭を掻いた。

言葉通り、男は私の撮影が終ると、ルーレットやブラック・ジャックのコーナーに駆けていった。

最後の取材先がこのドーバー海峡沿いの街であった。パリの北駅から列車をひとつ乗り継いだ終着駅に、ドーヴィルの港町はある。

フランス人にとって、南のコート・ダ・ジュールと並ぶ有名な海の避暑地だ。コート・ダ・ジュールが地中海と遊ぶ〝渚の避暑地〟だとすると、ドーバー海峡の海岸は丘陵地が多く〝岬の避暑地〟と言える。

草原がゆるやかにひろがって、農場、牧場、競馬場、ゴルフ場がある。

競馬場から東へむかって歩いた。

昨夜、車の助手席で男が言った言葉が思い出された。

「どうしてギャンブルをするのですか」

質問が好きな男だった。

「君はどうしてするの？」

「好きだからかな、それに」

「それに何？」

「ひょっとして金が儲かるかもしれないし……」

「私も同じだよ」

「じゃ最終目的はやはり金ですか」
「……そうである時もあれば、そうでない時もあるな、ただ」
「ただ何ですか」
「金が目的だと言っておいた方が聞こえがいいからね」
「逆じゃないですか。普通、ギャンブルはロマンとか、詩があるとか言うじゃないですか」
「あれはうそだよ」
「うそですか？」
「私はそう思ってる。しかしこうやって車を運転するのは何年振りだろう」
「日本で車の運転はしないんですか」
「しなくなったね」
「どうしてですか」
「さあ理由はよく憶えていない」
ベルギーのオステンドの街から海岸沿いを走りながら、眠りはじめた男の寝息を聞きながら夜の街を眺めていた。
――ほぼ十年の間、私の運転する車の助手席にはあの女がいた。
私は女の歌う歌声や、フロントグラスに流れる風景に歓声を上げる声を聞いて、ハンドルを握っていた。夜ならばその顔がフロントグラスに映っていたりした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com